

狐谷遺跡出土の絵画文様のある土器〈図版参照〉

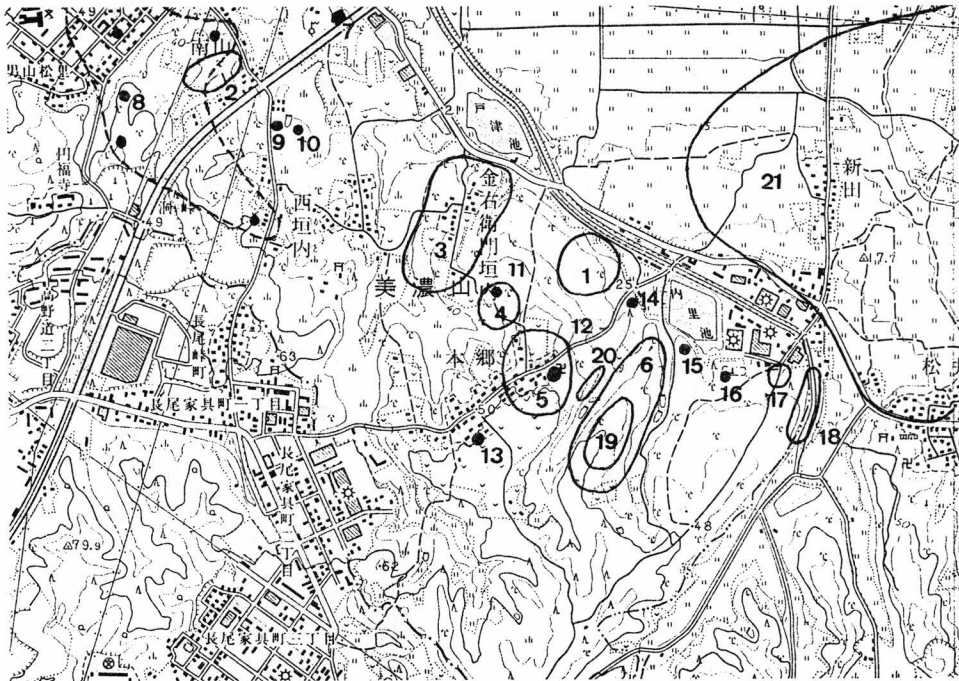
田代 弘

1. はじめに

前回、『京都府埋蔵文化財情報』紙上で、南金岐遺跡から出土した記号文のある弥生時代後期の土器を紹介した^(注1)。今回はそれに先行する一例として八幡市狐谷遺跡から出土した絵画土器をとりあげ、観察所見を中心に述べ紹介しておきたいと思う^(注2)。

2. 遺跡の概要

狐谷遺跡は京都府八幡市美濃山狐谷～内里柿谷に所在する、弥生時代中期から後期にか



第1図 狐谷遺跡の周辺の遺跡

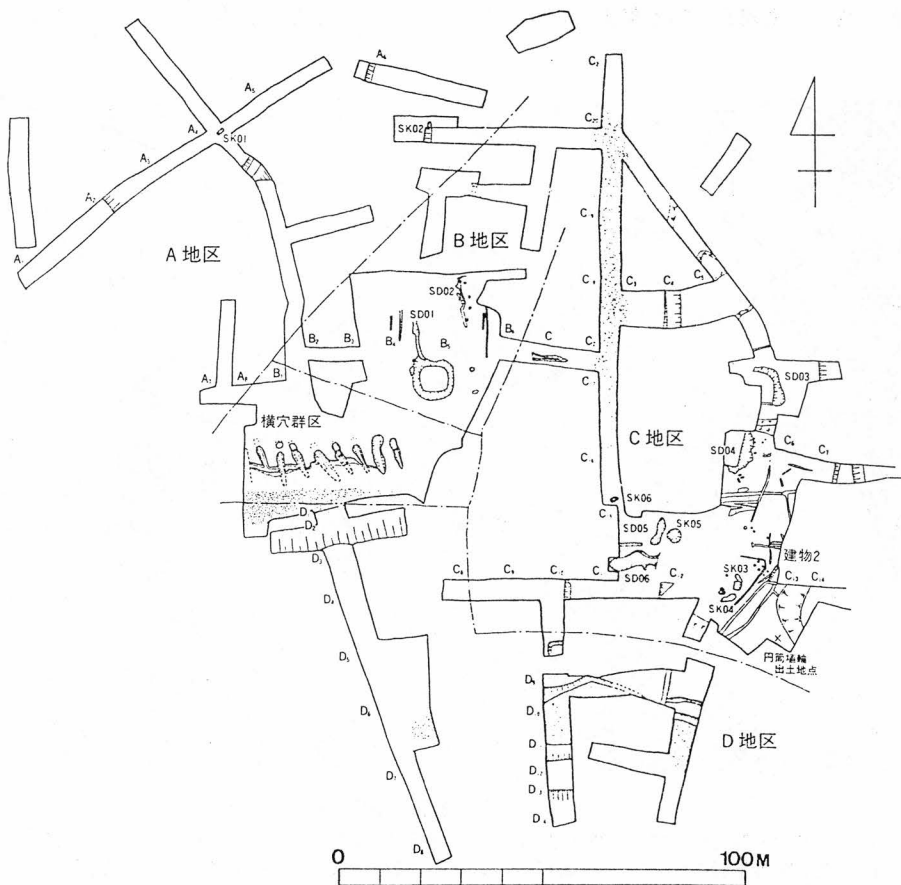
1. 狐谷遺跡・狐谷横穴群
2. 南山遺跡
3. 金右衛門垣内遺跡
4. 井の元南遺跡
5. 本郷遺跡
6. 美濃山廃寺下層遺跡
7. ヒル塚古墳
8. 南山古墳群
9. 西二子塚古墳
10. 東二子塚古墳
11. 野上遺跡
12. 王塚古墳
13. 小塚古墳
14. 円墳
15. 内里池南古墳
16. 荒坂古墳
17. 女谷古墳
18. 荒坂横穴群
19. 美濃山廃寺
20. 美濃山横穴群
21. 新田遺跡 (1:25,000)

けての集落関連遺跡である。当調査研究センターが京都市立南八幡高等学校建設工事に先立って実施した発掘調査により新たに発見された遺跡の一つである。^(注3)

遺跡は、男山丘陵から東へ派生する海拔30m程度の緩やかな丘陵上に立地している。交通の要衝を占め、前面には木津川によって形成された沖積地が広がっている(第1図)。

周辺には、有樋式石剣や磨製石鎌の出土で著名な金右衛門垣内遺跡のほか、井の元南遺跡・本郷遺跡・美濃山廃寺下層遺跡・幣原遺跡・式部谷銅鐸出土地など数多くの弥生時代遺跡が知られており、当遺跡はこうした集落と有機的なつながりのなかで形成されたものとみることができる。なかでも、金右衛門垣内遺跡とは隣接していて時期的にも触れあうところが多く、狐谷遺跡の集落母体を考える上で重要である。

発掘調査は、当調査研究センターが主体となって、1982年1月から7月までの期間中に二次にわたって実施した(第2図)。前半の調査では主に横穴の調査に主眼をおき、9基の



第2図 狐谷横穴群・狐谷遺跡遺構配置図(注3文献より転載)

横穴の内8基を完掘して数多くの成果をおさめた(横穴群区)。後半の調査では、横穴群に関連する遺構の存在を推定し、隣接する丘陵の平坦部分を調査したところ、方形周溝墓状遺構や溝・土壇などが検出された(A～D地区)。現在では、前半の調査で検出した横穴群を狐谷横穴群、後半の部分、とくに弥生時代の遺構が集中して検出されたC地区付近を狐谷遺跡と呼んで区別している^(注5)。

今回紹介する遺物が出土したのは、C地区・SK05である。SK05は、長径約4m、短径約1.5m、深さ約0.5mの楕円形土壇で、地山である赤褐色粘質土を掘りこんで作られていた。土壇中には暗褐色砂質土・暗黄褐色粘質土・黄褐色粘質土が堆積しており遺物は、その中層から検出された。墓坑と考えられ、弥生時代中期末葉に位置づけられるものである。

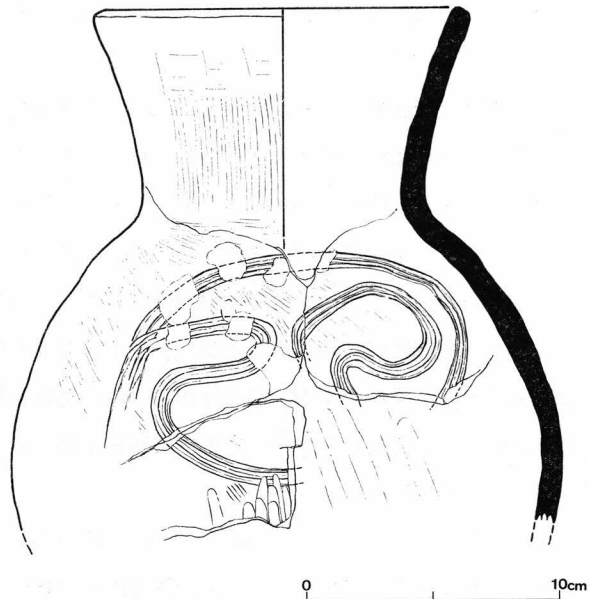
C地区ではこのほかに弥生時代に属する遺構としてSD04, SD05, SD06, SK03, SK06などが検出されており、中期後半から後期にかけての土器が出土している。

3. 遺物について

当資料は、短頸の壺形土器である(第3図・図版)。体部の下半は失われていて、肩部から上だけが残存していた。まず、形態・調整上の特徴を記していこう。

口縁部はわずかに外反しながら直線的に立ち上がり、端部はやや外傾して丸みを帯びた面を作る。肩部からややさがったところに最大腹径があり、倒卵形の体部をもつ。底部形態は明らかでないが、器体比べて割合小さな平底であると思われる。

調整は内・外面ともに丁寧におこなわれている。器体の外面は、主に板状の原体を用いて調整している。原体幅は約2cm、先端は摩耗しているものとみえ、凹部と凸部の区別がつきにくい。部位によっては、植物繊維の束状原体によって器体を搔き取っているように見えるところもある。最大腹径部付近には部分的に



第3図 遺物実測図

ヘラミガキを施しており、上半に比べてヘラミガキが多用されるようである。内面は口縁部においてナデ、肩部以下を指押さえの後に斜行するナデ調整を施す。胎土には緻密な素地を用い、径1~2mm前後の砂粒を混和している。砂粒は長石・石英が多く、その他の岩石が若干混じっている。鉱物は亜角礫が主体であるが、岩石は円礫化したものが多い。遺跡の近辺に産出する丘陵上の粘土を採取し、使用したものと思われる。色調は淡橙色を呈している。焼き締まりは良く、焼成は良好である。

次に文様について試みることにしよう。文様は、先端を3つの山と2つの谷に加工した楕状の工具を用い、肩部を中心に描いている。大きな下向きの弧と並列する逆S字状文の2つの要素からなり、互いに接続しあって一つのまとまりを作っている。モチーフは、曲線を基調としていて、抽象的であり記号文的な要素が強い。

肝心の部位が欠損しているので文様全体は知り得ないが、施文方向が左から右に向かうことなどから考えて連続して描かれていたものと思われる。

3. おわりに

以上、土器の形態と絵文様の形状について観察結果を記した。次に気づいた点を箇条書き的に記し、まとめにかえることにしたい。

(1) 絵文様は、短頸壺に描かれていた。これは水差形土器に系譜を辿ることのできる器種であり、凹線文盛行期が終わり、無文化を指向する中期末葉の所産と考えられる。弥生中期の絵文や記号文は短頸壺などの直口壺に施される事が多いが、当資料も例にもれず同様の傾向を示している。

(2) 文様は、絵画的であるが抽象的であり、記号文的な要素が強い。中期に盛んな具象文様から、後の長頸壺の時代において盛んにみられる様になる記号文の過渡的な様相を示唆するものといえ、興味深い資料である。

(3) 絵文土器は中期に、記号文は後期に盛んに行われており、畿内地域南部に分布の中心がある。山城は、これに隣接する地域でありながら類例に乏しく、いずれもふるわない。^(注6) いまのところ中期に属するもので絵文様をもつ確実な例は、中久世遺跡・古市森本・神足遺跡・涌出宮遺跡など4遺跡を挙げ得るのみであり、^(注7) ^(注8) 帰属時期が明らかでない東土川遺跡例を加えても5例を超えない。^(注9) ^(注10) ^(注11) 涌出宮遺跡出土例を除くといずれも破片資料であり、器種が明らかなものは少ない。

このようななかであって、今回紹介した例は器種が明らかであるとともに残存度が良く、^(注12) 文様構成もほぼ明らかであった。山城地域での弥生時代絵文資料上貴重な一例の追加とな^(注13) った。

(4) 狐谷遺跡は集落の外縁に位置する墓地的な性格が考えられている。^(注14)なかでも絵画土器を出土したSK05は、船底形を呈する土壇であり埋葬用の施設である可能性が高い。

ところで、「長頸の壺+記号文」は、畿内後期においてはその出土状況や共伴遺物からみて農耕祭祀に伴う儀礼的行為に供せられる場合が多く、また畿外においては、生と豊穡を祈念する農耕儀礼とは反対に葬送の場において用いられることがあったことが知られている。^(注15)つまり「長頸の壺+記号文」は『生と死という対立する二元的世界観』が最も極端に表出される場で用いられた土器と言うことができる。^(注16)狐谷遺跡の場合、墓所という遺構の性格付けが的を得ているとすれば、絵画土器は供献用の土器とみなすことができ、そこに施された文様はおのずと葬送儀礼との強い関連性を指摘することが可能となる。とすれば、当資料は畿内においては数少ない葬送儀礼に伴う絵画的文様の一事例として評価し得ることになる。

なお、小稿作成にあたっては、京都府教育委員会文化財保護課奥村清一郎技師に御教示いただいた。また写真撮影については高橋猪之介氏に御協力を賜った。文末ながら記して感謝の意を表します。<1985.12>

(田代 弘=当センター調査課調査員)

- 注1 田代 弘「南金岐遺跡出土の記号文のある土器」(『京都府埋蔵文化財情報』第19号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986.3
- 注2 注3文献, 第53図に該当する
- 注3 久保田健士「1. 狐谷横穴群」(『京都府遺跡調査概報』第8冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983.3
- 注4 『八幡市誌』第1巻 八幡市 1986.1
- 注5 京都府教育委員会『京都府遺跡地図』第5分冊[第2版] 1985.3
- 注6 佐原 真「弥生土器の絵画」(『考古学雑誌』第66巻第1号 日本考古学会) 1980.6
- 注7 『中久世遺跡発掘調査概報 昭和56年度』 京都市文化観光局 1982.3
- 注8 岩崎 誠「2.(仮)古市保育所建設にともなう発掘調査概要 長岡京跡左京第17次調査(7ANMMT地区)」(『長岡京市文化財調査報告書第5冊』長岡京市教育委員会) 1980
- 注9 山本輝雄・久保哲正「1. 長岡第九小学校建設にともなう発掘調査概要 長岡京跡右京第10・28次調査(7ANMMB地区)」(『長岡京市文化財調査報告書第5冊』長岡京市教育委員会) 1980
- 注10 林 和広・高橋美久二「涌出宮遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報 (1969)』京都府教育委員会) 1969
『史跡 高麗寺跡第一次範囲確認調査概報』山城町教育委員会 1985.3に遺物写真が掲載されている。
- 注11 吉村正親「4. 東土川遺跡(NG9)」(『京都市内遺跡試掘立会調査概要』京都市文化観光局) 1983.3
- 注12 あえて類例を求めれば愛知県貝殻山遺跡から出土した蓋形土器に描かれた「櫛描きの顔」

を挙げることができる(佐原 真『弥生土器』至文堂1976)。しかし、時期的・地域的に隔たりがあり文様意匠が同一のものともみならずことはできない。

注13 この5例の文様は、具象的文様をもつものと曲線的なモチーフをもつものに分けることができる。前者は神足遺跡・中久世遺跡・東土川遺跡である。神足・中久世遺跡例は2つの弧で限定した空間内を斜格子で埋めるいわゆる体内充填の方法(注6を参照)をとっており、畿内通有のありかたを示している。後者は古市森本遺跡・涌出宮遺跡例で、狐谷遺跡例もこのグループにはいる。ただし、古市森本・涌出宮遺跡は文様の原像が流水文等の既存の抽象的文様に求められるのに対し、狐谷遺跡例は具象的文様である可能性がある点で基本的に相違していると考えられる。

注14 注3・5と同じ

注15 藤田三郎「弥生時代の記号文」(森 浩一編 同志社大学考古学シリーズI『考古学と古代史』明文舎) 1982

注16 注15と同じ



1. 絵画文様をもつ土器 2. 同細部